

# 五歳児を 卒園させて



青 木 秀 子

三月に入り、おひなまつりを終えたあとは、朝から晩まで、ただひたすら、たくさんの事務をこなすこと、その中のアルバム作りを通し、一人一人の子どもを心に刻むこと、その子どもたちの表情の変化から、自分の力の足りなさを反省すること、に終始していた。

だから、三月十九日、卒園式。何となく、スポッときたという感じである。でも、卒園式も終わり、へやに戻って、いざ子どもたちに何か一言いおうと思ったとたん、声がつまってしまった……。続いての謝恩会が始まって、どことなく元気がでないでいると、「先生、元気だしてよ」と励ましてくれる女の子たち。また、会も終わり、ほんとうに園を去る段になって、玄関までじっ

と手を握って、一言もなくひっぱっていく男の子……。

就職してこの二年間、いったい何をのぞんで夢中になってやってきたのか、具体的な形ではわからなかった。でも、今こうして、あの子の声、この子の手のぬくもりと、一人一人の子どもの、また親との心のつながりを感じる時、私は、これを求めているのだ、とわかった。また、今までの幼稚園の生活は、そのつながりの上に流れてきたことも、あらためて感じている。

二年前、その時の私は、机上の勉強のみを続けていても、これ以上何も生まれてこないし、どこかおかしい世の中を、少しでも変えていくことはできないかと、生意気にも考え、まったくの鼻

息だけで、現場にとびこんだ。その私が、折々ぶちあたり、教えられ、つかんできたことを綴っていきたいと思う。時には、子ども側の側によったり、おとなの側によったりで、筋は通っていないかもしれない。しかし、その時々、私を強く支え、占めてきたことがらなのである。

#### ●四歳児一学期から

三年保育からの十五名と入園したての二十名。しかし、私にとっては、皆、新しい。活発に動きまわる子は動く。動かない子はじっといすにすわっている。集まって何かする気配がないと、「何もしないの。じゃきよなら」と外のくつをかかえて帰ろうとする子を、あわててひきとめ、廊下にひっくり返り「おばあちゃんに、でんわしてよ——」と泣いている子をなだめすかし、抱いて、あちこち歩きまわって暮れた一日。

そんな中で、それまで快調に遊んでいた子が、朝、母親のあとを追うようになってしまった。しかし、きょうこそは私の方を向かせるんだ、と決心していた。案の定、母親のあとを追う。しかし、ぎゅっと抱いて離さない。むこうも抱いた手にかみついていた。それでも離さないと、力いっぱいかみついて、もうこれで……と思ったのか、かみつくのをやめた。私の手に、赤くはつきり歯あとがついた。それを見たその子は、からだの力をスーッとぬ

いた。しばらく抱いてブランコにのったりしていると、自分からおりて、遊びにいった。少しして「せんせい、えのぐしたい」といつてきた。前日まで私に、「お姉ちゃま先生(実習生の呼び名)ねえ……」と話していた子である。やっと私も「先生」に昇格した。

このように、子ども一人一人と、いろいろな形で、関係をつけていく中で、子どものことば一つ一つに、それまで身構え緊張していた私が、一つ一つ解きはぐされていくのを感じ、会う人ごとに「人間とつきあうってすごいよ。ねえ聞いてよ」と話したくなる気持になっていった。

また、母親に話をするということ一つをとっても、実際に子どもと生活をともにしている立場にあるものなら、私のような新米のいうことでも、耳をかしてもらえらることも経験し、その喜びと責任とを感じた。

#### ●四歳児二学期から

そろそろ、いろいろな課題が入ってくる時期になってきた。

「運動会」もその一つである。皆でするお遊戯を、覚えてもらわなくてはならない。しかし、子どもたちにとっては、運動会とは、そのお遊戯の中での自分の位置とはと、全体の中での自分がつかめていない。そんな状態の子どもたちに、無理なく覚えても

らうことを考え、先輩の先生に学びながら、とりくんだ。

時間をかけ、環境づくりである。お遊戯にしているものを作ったり、レコードを他のレコードにまけてかけたり、誰かが「なに、これ」ときたら、先生と一緒に動いたり、お遊戯の順序でなく、それをつくっている動きはできることを確認したり……である。そうしたことから、運動会のふんいきをつくり、合同練習を待った。

合同練習の日、初めて順序を追い通してやるのを見、先生についてやった彼らの目の色は、真剣だった。そしてその後何回かの合同練習で、運動会を子どもに興味の山にもっていった気がする。

運動会、いえそればかりでなく、いつのまにか子どもからとび出し、浮かび上がったものを、再び子ども達の生活の中に入れ、本来に戻すことの可能なことと、またそうしなくてはならないことを、しみじみ考えさせられた。また、幼児教育ですべき「人のいうことをきく時は、真剣にきく態度を育てる」とはこのことなのかと、すんだあとで結合したものである。

また、ちょうどそのころ、お山のイチョウを切らなくてはならない、という問題がおきた。これは、結果的にはいろいろな方のご尽力で切らずにすんだが、その時の私は、「これは子どもに大切なものだから、どうぞ切らないでください」ということを、自信をもっていえなかった。むしろご父兄の方々が「何とかして

ください」という声を、純粹に子どもの側に立って、あげられた。はっきりいえば、私は何もできずに終わった。イチョウは守られた。

でも、その後、ほっとした顔のイチョウの木の下で、子どもたちがままごとをしていた。穴を掘り、ぎんなんを捨てるのが二、三人に見られた。そのうちに、毎日、登園するやお山の上に乗って、お弁当までおりてこないことが続いた。

ジャングルジムをベッドにし、石や、木、草、かわらの焼けのこり……全部生かしてのままごとである。草をしき、木をくべ、車のタイヤのはずれたのをかまどにし、ふるいのおなべをかけ、かわらのやきいもをつくっている……。ごちそうができ上がる、固定円木のバスにのって「〇〇ホテルいき」である。八人ならんで歌をうたい、お出かけしていた……。

これをみた時、イチョウに限らず、草や木石のあるところが、子どもにどんなに大切かを教えられた。保育用品とは、これなのではないかと思う。また、子どもに本当にいるものは何なのか、それを子どもにわかって声にしなければならぬのは誰なのかを教えられた気がする。

#### ●四歳児三学期から

幼稚園にも慣れた子どもたちは、ありきたりの遊具でなく、何

かになったつもりで、友だちと遊ぶことがふえてきた。二学期のころから「チョウウチョの羽つくって」とか、「ウサギごっこよ」と耳をつけたり、レコードで楽隊をしたり……が出ていた。しかし、その断片的な小さな活動を、それ以上どうしようということにも気づかず、考えず過ごしていた私だった。

ある時、実習生の研究保育で、他のクラスを見る機会をもった。その時、同じ小道具をつけ、ダンスレコードで、いきいきと踊っている子どもの姿を見た。はっとさせられた。子どもの出している芽に気がつかないで、それをみな枯れさせて平気できたのではないかと。これが、いつも先輩の先生からいわれていた「遊べるようになった次の段階での指導が大切。そこからがはじめて幼児教育のプロの人間にしかできないこと」なのだ知った。

自分のへやに戻り、子どもの引出しをそっとあけてみると、チヨウの羽が、たたまれて入っていた。……その子にそっと、わびたい気持だった。

私もレコードを捜し、かけてみた。しかしまた、そのレコードが問題なのだということを知った。子どもの動きにあうレコードはどれなのかを知らず、バレーレコードを選んできても動けないのである。保育者は、保育技術をもたなければ、子どもに満足を与えることはできない。一緒に生活していくことはできない。レコード一つ選ぶにしても、その知識がなければ、子どもと一緒に

踊るにしても、そのからだに合った動きがなければ……。保育技術が、子どもとの生活のどこで入用なのかわかってきた気がした。鼻息だけでは保育はできないことも……。

二月、三月と、やはり今までの指導の不足からだろうが、子どもたちの生活があれ、そこから親の間にまで混乱をおこさせてしまった。間接的にだが、いろいろなことを耳にし、私の信じてよいものはなくなっていた。一年間やってきたけれど、もうこれ以上続けるな、ということがいわれているのかもしれないも思った。「やめたら負け」と自分にむちうってみるが、やはり立ち上がれそうもなかった。

そんな時、終業式のあと一人の男の子がそばにきて、「うみの組になっても、同じ先生いる？ せんせい、いる？」と見上げて聞くのである。すぐに返事はできなかったが、腹をきめ、「いるわよ、先生だって一緒にうみの組になるのよ」というと、安心してように笑って帰っていった。

この子どもの言葉で、私はもう一度、いろいろなことを考えなおし、もう一度やるんだと思った。小さな小さな子どもの言葉を、大事にして、次を考えることをしよう。

## ●五歳児一学期、二学期から

いやでも何でも、実質が伴わなくても、五歳のうみの組になってしまった。しかし、大きい組になったということで、皆の意識も変化をみせはじめ、落ち着きがみえ始めた。私自身も、子どもとの歩調があう経験によって、救われていった。

二学期に入ると、子どもが何かを始めたら、そこへ行っているをみて出すと、おもしろいように吸収していってくれる。男の子も、とびまわるばかりでなく、いろいろつくることが出てきている。(十月)

「大きいハコない? 大きいのは、このくらい」と相談にくる。さすがすと、一つダンボールがみつかる。「きかんしゃつくるのよ」といっている。さてどうなるものか……と見守っていると、窓と入口を切つて、その中に入り、機関士になっている。他の子どもたちも、入れかわりたちかわり入り、楽しんでる。一週間ほどそうしているの、私も、『消えゆく蒸気機関車』などの話題もとびかうころだったので、本をもっていくと、何人かの子も、交通博物館のパンフレットをもってきた。

機関室にあくらの筒をつくることを考え、白ボールを二重にし、円筒にし、ポイラーをつけた。ガムテープでベタベタはつてもらい、さて車は?という、彼らは専門家、DCIだから四

つだという。そして「走るのにする」「のれるの」と夢は、見通しは大きい。しかし紙なので、のるのは無理。だから引っぱるか、押すことで妥協してもらい、板組木の車をつけることにした。

何日もかかり、やっとのことで車をつけ、皆で色をぬると、機関車らしくなってきた。「こんどは、ピストンね」とニコニコしている。ピストンといわれても、どうしたらよいかと困りはてていると、家から角材とロッドピンの形に切った板をもちこんできた。朝、廊下をヨタヨタ、四本の角材をかかえてくる彼をみると、何ともいえず気持ちがかみ上げてきた。

せっかくの木のパistonは、どうしても重くて無理。やっとボール紙にワリピンのピistonを思いつき、満足してもらった。

その間、一ヶ月余、本を読んだり、ミニチュアの機関車をついたり、設計図と称して絵をかいいたり……だった。また石炭貨物車も、何もいわなくとも他の子どもが作り出していた。

この活動から、毎日、機関車、機関車と考えてくると、子どもも考えてくる、というかけあいを味わい、子どもが「先生は、ほかがないと何もできないんだね」と肩に手をおいて、しんみりいった言葉がうれしくもあった。

この活動のあと、ああ五歳になったんだな、という感じを味わった。そして、子どもを手中に入れようとは思わないまでも、一

緒にやりたいという気持ちになれた。

かねてから、大自然の中に子どもを帰そうという園長先生のお考えを、何とか具体化したいと考えていた。あちこち捜してみるが、もう東京都内にはこれぞと思う場はみあたらない。年長組だし、思い切って秩父の方を考えた。

電車の手配もうまく都合が付き、防げる事故はおこしてはならないという緊張のもとに、その日がきた。

絶好のお天気！ 芦ヶ久保の駅をおりと、山からのふきおろしに落葉がおどり、まっさおな空、まっ白な雲、まっかな柿の実と、下見の時以上に、秋が待っていてくれた。

「雲に近くなるみたい。おーい、雲くん、会いにきたんだぞーどこへいくんだい」こんな言葉が、思いもかけない子の口から出てくる。また、付添も五人と最小限のためか、子どもも「やって」という言葉もなく、自分たちで考えて、工夫してすることがみられた。

帰ってから、どこかふんいきにはりも感じられ、また、一人が山のぼりの絵とってかき出すと、皆がかき出したのにはびっくりさせられた。

都会の幼稚園は、園のただけについては、片手おちの保育になつてしまふのではないかと思う。

また、まきを自分たちでつくって、おもちつきをする機会にも恵まれた。

二期期……何かいわゆる幼稚園的にまとまった大きな活動の可能な時だろうが、それをやめ、山のぼり、労働……としてみて、都市の幼稚園の子どもに必要なものは、上品なうわべだけのものではなく、人間としての本当の上品さを育てることだ、ということを知った。それをどれだけ、あの子たちに実現できたかわからない。しかし、子どもを青い空の下に連れ出すことで、目の輝きも、言葉も変わることは確かだった。

### ●五歳児二期期

幼稚園生活の最後にさしかかり、それまでいろいろと手をやり、なやんできた子にも、グンと落着きが見えはじめてきた。お友だちと、いっぱい遊んでおきたいという気持はどの子にも強くみられる。

そんな中で、おひなまつりの集まりをして、年少の子や、母親たちに楽しんでもらうという、年長組の恒例行事が近づいた。

全員が出られ、うたも踊りもお話も、総合していけるもの、それまで日ごろ遊んでいたもので、という線で、だしものをきめていった。

しかし、皆友だちと遊びたくて、そのあい間をぬって、小道具

を作ったり、言葉を考えたりという調子だった。しかし、日もせまり、自分の役がはつきりし、具体的にどうする、ということがつかめてくると、こちらを向いてきてくれた。そして、練習の時ゴタゴタ問題をおこしていた子も、当日は一生懸命やってくれた。

この、子どもにとっても私にとっても大きなとりくみは、いろいろなことを教えてくれた。自分の身についたもので、日ごろ、存分に動いて保育していなかった、ということ、(先生がやらなければ、子どもから出てくるものには限度がある)また、お互いに人のすることを見たりする時の態度という、しつけの面でも欠陥のあったこと、……など。

幼稚園という、人間が生活する場においては、私自身の生活態度なり、保育技術なり、心のあり方なり、私のすべてが、ごまかし、かくすことが許されない状態に追いやられた。「もっともっと動けば、もっともっと子どもと密接になり、そうすればそこで見えてくるものがある」と先輩の先生にいわれた。その言葉をかみしめながら、二年間のこと、それ以前の私の生活を思い返している。

二年間、まわりの先生方から、いろいろ助けていただき、教えていただいた。また、あの卒園していった子どもたちからも…。

私に最大の贈りものをしていってくれたことを思うと、ただ、多くの犠牲を強いてきたことをすまなく思う気持ちでいっぱいである。

今は、次にもたせていただく子どもたちには「あの子どものもつ目の輝きをつぶさないように。さわやかな心で、子どもに体当たりしていこう」など考え、あの手ぬくもりと声が、この私の気持ちをささえてくれている。(お茶の水女子大学附属幼稚園)

